

「CCSの実証および調査事業のあり方に向けた有識者検討会」
開催趣旨

国際エネルギー機関(IEA)報告書によると、2060年までの累積CO₂削減量の14%をCCS(Carbon Dioxide Capture and Storage; 二酸化炭素回収・貯留)が担うことが期待されている。

我が国においては、エネルギー基本計画等に沿って、2020年頃のCCS技術の実用化に向けて、苫小牧での大規模実証試験や研究開発、CO₂の貯留適地の調査に取り組んできた。特に苫小牧での実証事業は、世界から注目されるプロジェクトとして、2018年5月末時点で約18万トンのCO₂圧入を達成する等、地元関係者と連携しながら順調に進捗してきた。

一方、我が国におけるCCSの実用化にあたっては、CCSコストの低減、十分なポテンシャルを有する貯留適地及び輸送手段の確保、国民のCCSに対する理解といった課題が、引き続き存在しているものと考えられる。また、国内のみならず、CCS事業(EORを含む)における日本企業の海外展開を促進する環境の整備について検討する必要があると考えられる。

上記の問題意識の下、「CCSの実証および調査事業のあり方に向けた有識者検討会」を開催し、CCSに係る今後の取り組みについて有識者により議論していただき、検討結果を今後のCCS事業に活用する。